

中学校の音楽科授業における教科横断型授業の試み

～アイヌ文化を題材として～

* 小 塩 さとみ • ** 板 橋 薫

要 旨

本稿では、音楽科の授業における教科横断型授業に関して、教員養成大学で音楽学を教える立場からの考察と、令和元年度および令和2年度に実施した附属中学校でのアイヌ文化を題材とした具体的な取り組みの報告を行った。令和元年度は道徳と、令和2年度は社会科と教科横断的な試みを行った。授業を受けた生徒の感想からは、音楽を育んできた文化や社会に対して理解しようとする態度が読み取れるものが多い。世界の多様な音楽に接する時には、音楽を単に「音を楽しむもの」と考えるのではなく、それを生み出した背景を含めて多層的に理解する必要がある。教科横断型授業は、音楽の文化的・歴史的な背景に関心を広げる学習手段として有効である。ただし、それを実現するためには、教員が多様な音楽に対する知識と関心をもっていることが必要である。教員養成大学における学生教育でも、学生が高校までのさまざまな教科で身につけた知識との関係を意識できるような教科横断型の視点をいれた授業が必要である。

Key words： 中学校音楽科、教科横断型授業、アイヌ文化、道徳、社会科

1. はじめに

本稿は、音楽科の授業における教科横断型授業に関して、教員養成大学で音楽学を教える立場からの考察と、中学校での具体的な取り組みの報告を行う。中学校での授業実践報告は、令和2（2020）年度宮城教育大学重点支援研究「音楽科と社会科の教科横断的授業づくり～民俗芸能や郷土芸能を題材として～」の研究成果の報告を兼ねる。

小中学校の音楽科では、多様な音楽が取り扱われている。かつては西洋の芸術音楽（クラシック音楽）や西洋音楽のスタイルで日本人が作曲した楽曲が主たる学習の対象であったが、現在はそれに加えてポピュラー音楽、日本の伝統音楽、世界のさまざまな地域の音楽も学習の対象となっている。音楽科の授業は、児童や生徒にとって身近で聞き慣れた音楽だけでなく、未知の音楽にも触れる機会を提供しているのである。

未知の音楽に触れる授業では「音楽のよさを味わお

う」といった学習目標が提示されることが多い。しかしながら、「音楽のよさ」を感じるためには、同種の音楽に対する経験知が必要である。経験知を持たないで音楽に接する場合には、その音楽がどのような環境でどのような人によって作られたものであるか（時代背景や文化的背景）、その環境において音楽がどのような社会的役割を果たしていたのか、その音楽の特徴的な要素がどのような美的感覚と結びついているのか等の知識を補いながら、そのよさを推測していく作業が必要となる。

小学生は全般的に未知の音楽に対して好奇心旺盛に反応するが、すでに自分の好みの音楽が確立している中学生以上の年齢になると、未知の音楽に接した時に、自分の好みの音楽知識を前提にその音楽のよさを判定しようとすることも多い。多様な音楽に接する経験は、多様な文化の存在に気がつき、自文化について見つめ直す機会ともなるが、そのような経験を授業の中で作り出すためには、音楽をより広い文脈の中に置

* 宮城教育大学 教員養成学系教科内容学域 芸術・身体科学部門 音楽学

** 宮城教育大学附属中学校教諭

いて考える態度が必要となる。音楽科の授業を他の教科と関連させて教科横断的な授業を行うことで、音楽について、新しい観点をもつことができるのではないか。本稿は、そのような問題意識に基づいて行った授業実践に関する報告である。「1」から「3」と「6」を小塩が執筆し、「4」と「5」を板橋が執筆した。

2. 音楽科と他教科の関わり

～音楽学からの考察～

教科横断型授業の報告を行う前に、教員養成大学で音楽学を教える立場から、音楽科と他教科の関わりについて考察を行う。筆者が教科横断型の授業に関心を抱くようになったのは、教員養成大学における音楽学関連の授業を担当する中での体験が関連している。音楽作品の成立背景に対して関心をもつためには、音楽以外の教科の知識が大きく影響するのである。

例えば「日本音楽史」の授業では、高校までに学んできた古典や日本史の歴史に対する興味関心や知識が、講義内容の理解に大きく影響する。平安時代に貴族を中心に演奏されていた雅楽は、『源氏物語』や『枕草子』でも取り上げられているし、『平家物語』は文学作品であると同時に平家琵琶によって語られる芸能でもある。日本史でも文化史として能・狂言や歌舞伎について学ぶ。これらの古典や日本史の知識は「日本音楽史」で学ぶ内容と関連が非常に深い。「西洋音楽史」も同様に世界史との結びつきが強い。音楽を専門とする学生よりも、副免許取得や授業内容への関心から受講する他専攻の学生の方が、授業の理解度が高いことも多い。

「民族音楽学」の授業では世界のさまざまな地域の音楽を学ぶので、その音楽が演奏されてきた地域の自然条件や社会環境、文化的特徴など社会科の地理分野との結びつきが強い。宮城教育大学では、筆者の着任前から音楽科教育の降矢美彌子¹が多文化音楽教育や異文化音楽理解の促進に尽力し、学生は授業の中でインドネシアのガムランやブラジルのサンバ、韓国の農楽、アフリカの太鼓ジェンベ、口琴やホーミーなど、世界のさまざまな地域の芸能を実習する機会が設けられている。しかし、音楽実技の体験が音楽の文化的・

社会的な背景への関心に直結するわけではない。筆者が担当する授業では、個人差はあるものの、自分達と異なる生活環境で暮らす人々に対する関心は概して低く、音楽を社会や文化と結びつけて考えることに慣れていない様子が見受けられる。

音楽史については、歴史に対する関心が低くとも、将来音楽の教員となるために知っておくべき内容であるという意識が比較的高い。音楽鑑賞の授業を行う時に、作曲当時の時代背景について説明を行うことも多く、なぜ学ぶ必要があるのかを理解しやすいのであろう。これに対して、世界の音楽は、音楽科の授業でどのように取り上げるかまだ試行錯誤の状況であると言える。

平成28(2016)年度から「民族音楽学」の授業で、世界の音楽を紹介するだけでなく、民族音楽学の研究の視点を紹介することにも重点を置くようにしたのは、世界の音楽を紹介する時に、「知らない」「珍しい」音楽文化を学ぶのではなく、音楽と文化の関係を考えることを授業で学生に体験させる必要があると感じたからであった。民族音楽学は、人間と音楽の関係を幅広く研究する学問領域であり、音楽学の一部門であると同時に、人類学や社会学などと共通の研究の視点をもつ分野である。授業では、『民族音楽学12の視点』（増野・徳丸2016）を教科書とし、音楽の仕組みや音楽の伝承方法に関する考え方を学ぶと同時に、「ローカルとグローバル」「アイデンティティ」「グローバル化と著作権」「マイノリティ」「ディアスポラ」など、現代の社会状況の中で音楽がどのような役割を持っているのかについても扱うようになった。

授業内容を変更することで、授業内で紹介できる音楽ジャンルの数は半減した。しかし、音楽について書かれたものを読み、自分の体験と照らし合わせながら教科書で紹介されている事例について考え、自分の意見を他の受講生と共有するという新しいタイプの作業を、多くの受講生は積極的に行っている。このような活動は、「実技科目としての音楽」とは異なる音楽の授業の展開につながる可能性がある。

1 音楽教育学者、ピアニスト、合唱指揮者。宮城教育大学の在職期間は平成6(1994)年10月から平成20(2008)年3月。宮城教育大学名誉教授。平成30(2018)年没。

3. 大学と附属中学校の連携

令和2(2020)年度に、学内の重点研究に応募して、音楽科と社会科の教科横断的な研究を行うことにしたのは、上記のように多様な音楽を授業で扱う時に、社会科で学ぶ知識と関連させることが重要だと考えていたからである。令和元(2019)年度の附属中学校の公開研究会で、SDGsを共通テーマとした教科横断的な授業研究が行われ、音楽科の授業ではアイヌ音楽を取り上げて、道徳と教科横断的な授業を実施していた。そこで、その成果を基盤に、社会科との教科横断的な可能性を探ることとした。

研究プロジェクト「音楽科と社会科の教科横断的な授業づくり～民俗芸能や郷土芸能を題材として～」は、筆者2名に加えて、山内明美(社会科教育講座)、守康幸(附属中学校教諭)、伊東真也(附属中学校教諭)、八木俊樹(附属中学校教諭)の4名を加えた6名をメンバーとし、前年度にSDGsの取り組みとして授業実践を音楽科で行っていたアイヌ文化について、社会科と音楽科で教科横断的に取り上げることが前提として研究を行った。以下に令和元年度と令和2年度に附属中学校の音楽の授業で実践したアイヌ音楽に関する授業実践の報告を行う。

4. 附属中学校音楽科での実践

音楽科では令和元(2019)年度及び令和2(2020)年度にアイヌ文化を教材とする授業を行った。本節では、授業構想の経緯、授業に向けた準備の過程、令和元年度及び令和2年度に実施した具体的な授業実践を報告する。

4. 1 授業構想の経緯

附属中の令和元年度からの音楽科の授業において、授業者である筆者(板橋)はアイヌ文化を教材として扱った。この授業は、附属中の第2学年を対象とする授業として立案し、令和元年11月8日に実施した「宮城教育大学附属中学校令和元年度公開研究会」での提案授業に位置付けたものである²。

指導計画は、次の3点を関連させて立案した。

- 1) 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』の「目標及び内容」(文部科学省2017)に基づく授業であること。
- 2) 附属中の校内共同研究として設定した以下の研究目標の達成に向けた授業であること。
- 3) 各教科において社会問題を踏まえた教科特有の学習課題を設定し、その解決に向けた指導過程を構成すること。社会問題の焦点化に当たっては、持続可能な開発目標(SDGs)の17の目標と関連させること。

音楽科の授業では様々な音楽文化を扱う。どのような教材であれ、世界の様々な音楽文化が人々の生活の中で育まれてきたものであることを踏まえ、文化の多様性や固有性を価値あるものとして尊重していこうとする態度の育成を学習活動の基盤にしたいと考えた。こうした観点と前述の3点を基に、題材名を「多文化共生と音楽～音楽ってなんだろう～」とした。SDGsについては17の目標の中の「10. 人や国の不平等をなくそう」と関連させ、「多様な音楽を味わうことを通して、世界の音楽に触れる上で必要な視点を考えること」を主たる学習課題に設定した。

4. 2 アイヌ文化の教材化に当たって

ここでは令和元年度にアイヌ文化を教材化するまでの流れを述べる。

「世界の音楽」や「郷土の音楽(または芸能)」を扱う授業では、「世界の多様な音楽を聴き比べよう」や「私たちの郷土の音楽を味わおう」といった題材名で、「声の特徴」や「楽器の音色」に着目した比較鑑賞を行うなど、それぞれの音楽のよさや魅力を自分なりに捉える学習指導例が多く見られる。こうした学習指導は、生徒たちにとって様々な音楽文化との出会いとなる一方、その教材の扱いが単に「文化の紹介」となってしまう、それぞれの音楽の違いを聴き取るに留まってしまうことが課題となる場合が多い。さらに、比較鑑賞するに当たり、「教師が提示した音源を生徒が聴

2 附属中では、平成18(2006)年に実施した「公開研究会」の授業において、当時音楽科を担当していた木村有子教諭が混声合唱の導入教材としてアイヌの音楽(ウボボ)を扱っている。その際の授業づくりには、当時宮城教育大学教授であった降矢美彌子が研究協力に当たった。

く」という活動の連続によって、生徒の学習に向かう姿勢が受動的なものになってしまうという課題も見られる。

こうした課題を踏まえ、令和元年度の授業づくりに当たり、生徒が題材全体を通じて音楽を聴いたり表現したりすることによる楽しさや新鮮さを味わい、その感情と学習活動の相互作用によって生徒それぞれの中に納得解や新たな問いが生じていくような状態を目指したいと考えた。そこで、教材曲を聴くだけにせず、身体表現も取り入れながら音楽を体感する活動を通して、生徒たちが問いに向き合う題材構成を考えた。

これらの具現化を図るための中心教材としたものが、「アイヌ文化」である。筆者(板橋)は、新潟県佐渡市で開催された「アースセレブレーション³2012」に参加し、藤本容子氏⁴によるワークショップを受講した際、アイヌの即興歌である「ヤイサマネナ⁵」を知り、いずれ音楽科の授業で用いたいと構想するようになった。

令和元年度の授業づくりに取り組んでいた時期は、東京2020オリンピック競技大会の開催目前であった。附属中では、保健体育科の学習においてオリパラ教育⁶を位置付けていた。オリンピック・パラリンピックがスポーツの祭典としてだけでなく文化の祭典とも呼ばれる(文化庁他2016)ことから、共生社会への理解を深める手立てとして、音楽科においても多様な文化を扱うことは意義あるものであると考えた。この「共生社会への理解を深める手立てとしての多様な文化」を象徴するものとして、アイヌの音楽を教材化することを構想し、指導計画の作成に当たることとした。

このように、「世界の音楽」の学習指導における諸課題、筆者とアイヌの音楽との出会い、オリパラ教育との関連の3つの理由により、中心教材を「アイヌ文

化」に選定した。

4. 3 教材曲の選定

アイヌ文化を扱うに当たって、その教材曲には、公益財団法人アイヌ民族文化財団のYouTubeチャンネルに掲載されている「踊り 浦河・釧路春採編⁷」から、「イカムツカサンケー」と「フツアレチュイ(黒髪の踊り)」を用いることとした。選曲に際しては、指導対象となる第2学年の生徒たちにとって、比較的容易に聴いて覚えることができ、身体表現も取り入れながら仲間と共に活動できることを条件に選定した。

多種多様なアイヌの音楽の中から映像資料を基に2曲を選んだものの、文化の特徴を表すものとしてこの2曲が妥当なのか、アイヌ文化と直接の関わりが少ない地域の教育活動でそれらを扱うことに対してアイヌに関わる人々はどうのように捉えるのか筆者(板橋)は検証の必要性を感じた。そこで、アイヌにルーツを持つ人々に直接相談することを考え、2019年10月15～16日に釧路・阿寒方面を訪問し、アイヌ文化に関する諸施設を見学しながら、阿寒湖アイヌコタン⁸で生活する人々を中心に話を伺うことにした。この実地調査に先立って相談を試みたのが、東京の大学に通いながら積極的にアイヌ文化に関する発信を行っていた関根摩耶氏(5. 5にて詳述)であった。関根氏には、それ以降継続して本プロジェクトに協力をいただいている。

阿寒湖アイヌコタンでは、降矢美彌子が著書(降矢2009)でムックリの演奏録音などの協力者として紹介していた弟子シギ子氏⁹を訪問した。弟子氏からは、弟子氏を始めとした伝承者によって幼い頃からアイヌの音楽に親しんできた世代が成長し、その人々が新しい伝承者となり、アイヌ文化が次世代に受け継がれて

3 太鼓芸能集団「鼓童」が1988年から佐渡市で開催している国際芸術祭。

4 「鼓童」創設メンバー。鼓童名誉団員。

5 主にアイヌの女性が歌う、自身の感情を表す歌。「ヤイサマ」とも呼ばれる。

6 平成27(2015)年に大会の基本方針が閣議決定され、以降「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」(スポーツ庁)の推進により、学校教育における「オリパラ教育」の充実が図られるようになった。

7 <https://youtu.be/IDLmlhqJrjM> (2021年8月23日最終確認) 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構作成のDVDを基にYouTubeに掲載している資料。この他、「白老・新冠編」「帯広・様似・白糠編」「札幌・静内・鶴川編」「旭川・釧路・弟子屈編」「阿寒・平取編」がある。

8 36戸・約120人が暮らす集落。前田一步園財団の3代目園主である前田光子氏が、アイヌの生活を守るために店や住まいのための土地を無償で提供したことから始まった。

9 幼少の頃からアイヌ文化を先人に学び、昭和45年頃からは阿寒アイヌ民族文化保存会において古式舞踊の伝承・保存にも尽力した。平成23年度アイヌ文化賞受賞。著書に自伝『私のコタン』(弟子2001)がある。

いる現況を伺うことができた。

弟子氏を始め、アイヌコタンで生活する人々に話を伺う際、「宮城県の中学校の授業でアイヌの音楽を扱いたいと思い、調査に来た」と伝え、人々の反応からは歓迎の意と共に驚く様子も感じられた。その反応の要因を尋ねると、「北海道でも、音楽の授業では特に取り組んでいない」「先生によっては扱うこともあるが、扱ったとしても特別授業のような位置付け」という答えが返ってきた。アイヌ文化を扱うことについて否定するような意見は特段なく、むしろ好意的な反応を得ることができた。また、劇場施設である阿寒湖アイヌシアター¹⁰ではアイヌ古式舞踊¹¹などを鑑賞した。プログラムは、リムセ¹²を中心とした構成がされ、その中に「フッタレチュイ（黒髪の踊り）」も組み込まれていた。

阿寒の人々との会話や、関係諸施設の訪問を通して、授業としてアイヌの音楽を扱うことやその教材曲の選定が妥当であることを認識したため、具体的な授業づくりに当たることとした。

4. 4 具体の授業実践

授業は、第2学年を対象として4時間構成で行った。ここでは、令和元年度の実践を経て改訂し、本プロジェクトに関わる取り組みとして行った令和2年度の授業を基にその具体的実践について述べる。中学校学習指導要領（文部科学省2017）及び学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所教育課程研究センター 2020）に基づいて設定した題材の目標及び評価規準は次のとおりである。

- 題材名「多文化共生と音楽～音楽ってなんだろう～」
- 内容のまとめり
〔第2学年及び第3学年〕B鑑賞(1)鑑賞ア(ウ)、イ(ウ)
〔共通事項〕(1)音色、リズム、旋律
- 題材の目標
「Clapping Music」、ベトナムのターイの音楽（杵つき合奏「エットム オン」）、アイヌの音楽（「イカムッ

カサンケー」「フッタレチュイ」）の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解するとともに、音楽表現の共通性や固有性について考え、それぞれのよさや美しさを味わって聴き、世界の様々な音楽の多様性を認め大切にする態度を養う。

• 題材の評価規準

- (1) 「Clapping Music」、ターイの音楽、アイヌの音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。
- (2) ①「Clapping Music」、ターイの音楽、アイヌの音楽の音色、リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。
②音楽表現の共通性や固有性について考え、それぞれのよさや美しさを味わって聴いている。
- (3) 表現の多様性に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

題材の導入では「これからの4時間を通して“世界の音楽に触れる上で必要な視点とは何だろうか”ということを考えてみましょう」と伝え、実際の音楽活動に入った。第1時では、身の回りの音がどのような状態で聞こえた場合に私たちが「音楽」と認識するかを考える手立てとして、手拍子のみで演奏する作品である「Clapping Music」（S・ライヒ作曲）を扱った。

第2時では、ベトナムのターイの人々の杵つき合奏である「トゥンロン」から「エットムオン」を取り上げた。これは人々の生活の中から生まれる音や動きから音楽文化が派生していく過程を捉えるための教材として山口：月溪2006を参考に選んだ。生徒は教師の実演と映像資料の鑑賞を通してリズムを覚え、臼と杵に見立てた木材を用いて覚えたりリズムを模倣することで、リズムや各パートの重なりに着目するようになった。脱穀作業で生じた音や、暮らしの中の遊びから生じた音が音楽文化へと繋がっていく過程を体験することを通して、生徒は人々の生活と音楽との関係を考察した。

10 阿寒アイヌコタン内にあるアイヌ文化専用劇場。

11 重要無形民俗文化財。北海道に居住しているアイヌの人びとによって伝承されている歌と踊りで、アイヌの主要な祭りや家庭での行事などに踊られる。

12 アイヌの踊りや踊りを伴う歌

第3時及び第4時では、アイヌの文化を扱った。第3時では、始めにアイヌのウポボ「イカムッカサンケー」を歌った。ここでは6～7人一組で円座になり、中心にシントコ¹³に見立てた容器を置いた上で、その蓋を叩いて拍を取りながら歌い、旋律を覚えた。アイヌのウポボの多くは、輪唱できる特徴を持つ¹⁴。主旋律を全員で覚えた後に、グループごとに2拍あるいは4拍ずつずらして入り、輪唱することから生じる響きを味わいながら活動した。



写真1 第3時の授業の様子

次に、「フッタレチュイ」の練習に取り組んだ。「フッタレチュイ」は、「黒髪の踊り」や「松の木の踊り」とも呼ばれ、松の木の枝葉が前後左右に揺れ動く様子を表した力強い踊りであり、これを踊ることは体力比べとしての様相も持つ。歌詞は次のとおり¹⁵である。

〈前半〉フッタレチュイ アラ フンナ フィ

〈後半〉フクン チュイ アラ フクン

ここでは1単位時間内(50分間)で取り組むため、前半部分のみを扱った。旋律そのものは短く、用いられる言葉も少ないことから、教師の範唱を聴きながらすぐに覚えて歌う生徒の様子が見られた。

旋律を覚えた後は、教師の踊りを生徒が模倣しながら、練習に取り組んだ。髪を振りながら踊る場面では生徒たちから驚きの声が上がった。踊り全体としては手拍子をしたり拍に合わせて腿や肩を叩いたりするなど、シンプルな要素から成り立っているため、円滑に

踊りを習得していく様子が見られた。

これらの活動を経て、生徒の振り返りでは次のような内容の記述が見られた。

- 言葉の意味もよく分からなかったし、始めは踊りも恥ずかしかったけれど、踊ったり歌ったりしているうちにだんだんおもしろくなってきました。世界の音楽にもそのようなものがたくさんあると思います。やっぱり、楽しむということが大事な、と思いました。また、その音楽の成り立ちを知ろうとする姿勢も大切だと思いました。
- 今日はアイヌの踊りを楽しみました。頭を振ったりする踊りは松が風に揺れている様子を表していて、自然への価値観やそのようなものに影響されていることが分かりました。また、子どもたちにもこの踊りが引き継がれていて、音楽は時や人をつなぐものだと感じました。
- 今日はアイヌの音楽に触れた。歌も踊りも特徴的で独自性があると感じた。歌は、同じ歌詞を繰り返すというものだった。「かえるの歌」のようにおいかけてをして歌うなどもし、楽しかった。簡単な動きだが、ずっと踊り続けるにはとても体力を要するものだった。

第3時の学習活動に対する生徒の様子や振り返りの記述からは、初めて接したアイヌの音楽への興味・関心が見られた一方、普段馴染みのある音楽や身の回りの伝統文化との異質性を感じ取る様子も見られた。この「異質性を感じ取ること」も、生徒たちが課題に



写真2 第3時の授業の様子

13 行器(ほかい)とも呼ばれる四角ないし円い筒形の脚付き容器。儀礼の際にはシントコで発酵させて作った酒を神へ捧げ、この酒で来客をもてなした。

14 輪唱曲は「ウコウク」と呼ばれる。

15 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「アイヌ生活文化再現マニュアル 踊り」(<https://www.ff-ainu.or.jp/manual/files/2013odori01.pdf>, 2022年10月22日最終確認)

向かう探究の過程において大切にしたいものである。

最終時に当たる第4時では、授業の導入教材として「Vuelie (From "Frozen")」¹⁶を聴かせ、その認知度を探った。この楽曲は、サーミ¹⁷の音楽文化であるヨイク¹⁸と、ヨーロッパに伝わる讃美歌を基に生まれた作品である。この楽曲が用いられた映画「アナと雪の女王」は、令和2年度の中学2年生にとって認知度が高く、どの学級でも楽曲を流すとすぐに生徒は「“アナ雪”の曲」という反応を示した。一方、この楽曲とサーミの文化が関わっていることを知る生徒は、全学級を通していなかった。

サーミの人々は、サーミ語の禁止や学校教育の同化政策など抑圧された背景を持つ（小内他2013）。1989年のサーミ議会の発足が一つの契機となり、現在ではノルウェーが国家としてその文化の保全に取り組んでいる。関根摩耶氏は「平成30年度危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島大会）」に参加した際、サーミの代表として参加した15歳の女性と交流している。第4時の授業では、“アナ雪”の楽曲を聴くことに続き、アイヌとサーミのそれぞれの社会状況を知る手立てとして、その交流の様子を伝える映像資料¹⁹を用いた。

こうした指導過程を経て、最後に一連の学習内容を振り返りながら、題材の冒頭で示した「世界の音楽に触れる上で必要な視点とは何だろうか」という課題の考察を行った。生徒の考察からは、次のような内容の記述が見られた。

- 世界の音楽には数えきれないくらい種類があるけれど、どの音楽もその音楽を演奏する人たちの生活と密接に関わっているということが分かりました。自分たちが大切にしている節目や行事、普段の遊びなどで歌う歌があるように、どの人たちにもそういう歌（音楽）があることを理解し、お互いに楽しむことが大切だと思います。音楽が違うだけで、それを楽しんでいるというのは共通だという視点が大切だと思いました。

- 世界の音楽に触れる上で必要な視点は、その音楽を誇りに思っている人がいるということを入念に入れておくことだと考えた。今回の授業を通して、世界には固有の音楽がたくさんあることを知った。それらは、存在を認められなかったり、認められていても誇りに思える環境でなかったりするみたいだ。私は、差別なく、その固有の音楽を誇りに思えるような世界になるためにも、聴く人は相手の思いを感じる必要があると思った。
- 「アナと雪の女王」で使われている曲がノルウェーのサーミという人々の歌だと思っていたので、とても意外で驚きました。サーミの人たちはノルウェーの中で「カッコいい」というイメージになっているというのがすごいと思ったし、日本はまだそこまでいっていないとも思った。アイヌについては私も「アイヌ」という言葉を知っていたくらいで、授業で関根さんの話を聞くまでほとんど何も知らなかったもので、この先日本が人々を尊重する国になればいいなと思いました。
- 世界で多様性が求められている中、民族の人たちだけではなく、私たちもそのような多様な文化に興味を持って働き掛けることが大切だと感じました。民族の人たちが社会で活躍することも大事ですが、彼らの文化や言語を誇りをもって発信できるような雰囲気を作ることができたらいいと感じました。

5 音楽科と他教科の横断的授業の実践

令和元年度の授業では道徳の授業と、令和2年度の授業では社会科の授業と連携して授業を行った。中学校音楽科の授業時数は、第1学年が年間45時間、第2・3学年が各35時間と定められている。限られた時数だからこそ、生徒にとって更なる学びや新たな問いに繋がる音楽と出合わせる仕掛けが必要である。その仕掛けの一つが、「他教科での学びを生かす学習指導」である。本節では、これらの連携授業について報告する。

5.1 道徳科と音楽科の「教科等横断」

令和元年度の公開研究会で音楽科の授業を行うに

16 ディズニー映画「アナと雪の女王」のオープニング曲。作詞・作曲は Christophe Beck、Frode Fjellheim による。

17 ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北部とロシア北部コラ半島に居住する先住民族。

18 サーミの文化における伝統歌謡あるいはその歌唱法。

19 KANGLO TV YouTube チャンネル内の映像（「世界90の国に3億7千万人が生きる先住民族とその文化・言語を守れ！アイヌ（日本）、サーミ（ノルウェー）の場合」）、<https://youtu.be/bJ9VWMVsxOo>、2022年12月22日最終確認）。

際して、学習指導要領の鑑賞領域で記されている「(ウ)我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性」を生徒が「理解する」ためには、音楽科の授業で扱うだけでは生徒に情報や経験が不十分ではないかと感じた。

そのため、音楽科の授業と同時期に第2学年の道徳で関根摩耶氏について学ぶ授業に取り組んだ。授業の主題、内容項目及び指導過程等は次のとおりである。

主題名：伝統や文化の尊重

内容項目：C— (16) 郷土の伝統と文化の尊重

資料名：「慶應の女子大生が「アイヌ語」のユーチューブを始めた理由」Forbes Japan ウェブサイトより²⁰

授業日：令和元年10月30日

対象：宮城教育大学附属中学校令和元年度第2学年

授業者：各学級担任

主な指導過程：

(1) 導入

- ・前時の授業（郷土に関わる内容）の復習

(2) 展開

- ・「アイヌ」について学んできたことを尋ねる。
- ・『慶應の女子大生が「アイヌ語」のユーチューブを始めた理由』の資料を通して、範読「関根さんはどのような思いを大切にしながら様々な活動をしているか」について考えさせる。
- ・教材動画（「しとちゃんねる」等）を視聴する。

(3) 終末

- ・この時間に感じたことを道徳ノートに書き、郷土のためにできることについて考える。

道徳では通常教科用図書を用いるが、内容項目16「郷土の伝統と文化の尊重」の道徳的価値²¹に向かう資料として、本授業ではウェブ上に掲載された関根氏のインタビュー記事を用いた。

道徳の授業に続き、音楽科で行ったアイヌ文化の授業の終末場面では、道徳の時間の学びと関連させながら振り返りを記述する様子が見られた。

- ・アイヌの人たちの音楽を実際に体験してみて、道徳の時間にも聞いた自然と近いところにある感じを味

わえました。神さまや自然を大切にしようなどところから音楽が生まれることは多いし、それらは神秘的だと思います。

- ・昨日の道徳の時間に関根さんが髪を降ろしてバンダナをしている写真があったことを思い出して、もしかしたらフットレチュイをするためだったのかなと思いました。言葉はすぐには分からないけど、響きがくせになっておもしろく、もっと知りたいと思いました。アイヌの音楽の特徴は簡単な動きを繰り返す（ずらす）というところなのかなとも思いました。
- ・アイヌの言葉は私たちが使っている言葉とは全く違った響き特徴的だということを前の道徳のときに知りましたが、歌を歌ってリズムをとったりすると、言葉の意味がわからなくても独特なリズムを何回も繰り返すのがとても楽しかったです。最後の踊りでは「松」を表している様子など、その土地の特色が表れている点を大事に、これから世界の音楽を聴いていきたいです。

道徳の授業は、基本的に各学級担任が行う。授業で扱う内容項目や資料等は、各学級担任の判断で決めるのではなく、どの学校においても各学校の重点指導項目や生徒の実態に即して作成される道徳教育年間指導計画に基づきながら選ぶものである。附属中においても、年間指導計画に基づきながら、各学年の教員が一週ごとの輪番で授業の立案をし、教員間でその指導法を検討しながら毎回の道徳の授業づくりを行っている。そのため、学級担任を始めとする様々な教員が意見を出し合う中で、それぞれの教員が担当している教科の視点や、多様な価値観から教材を捉えていくことのできる機会になっている。

前述の授業は、音楽科（筆者）、国語科、英語科、数学科の教員がそれぞれ当時担任をしていた学級の生徒を対象に行った。教科の異なる4人の授業者が実践することで、各授業者にとっても関根氏の考え方やアイヌ文化を知る機会となった。道徳の授業は、資料を通して生徒だけでなく、授業者も考え方を広げることのできる場である。また、音楽科の授業でアイヌ文化を扱うことを念頭に置きながら実践したことで、生徒

20 谷村一成による記事（<https://forbesjapan.com/articles/detail/28565>、2022年10月21日最終確認）。

21 『特別の教科 道徳編中学校学習指導要領解説（文部科学省2017）』では、「道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。学校教育においては、これらのうち発達の段階を考慮して、生徒一人一人が道徳的価値観を形成する上で必要なものを内容項目として取り上げている」と示している。

たちが現在音楽の授業でどのような学習に取り組んでいるのかを様々な教職員が知る機会ともなった。

5. 2 社会科と音楽科の「教科等横断」

令和2年度には、重点研究の一環として、附属中の守康幸教諭による社会科の授業が行われた。地理的分野の授業である北海道地方の単元の中で、関根氏と生徒がオンラインでの交流を持ち、アイヌ文化や人々の暮らし、物事の考え方などについて学んだ。

〔単元構成〕※ 関根氏との交流は2時間目で実施

1 北海道地方の自然環境

2・3 厳しい自然環境と共に生きる北海道

- ・いまも続くアイヌ文化・暮らし
- ・厳しい自然環境を克服した稲作の歴史

4 大規模化してきた酪農、漁業

5 歴史や北国の自然を生かした観光業

6 北海道の持続可能な未来に向けて

授業当時大学在学中であった関根氏による講話は、生徒にとって親近感を得ることに加え、アイヌの人々の暮らしを身近なものとして捉えられる機会となった。振り返りの記述からは、次のような内容が見られた。

- ・今回の授業を通して、アイヌに対してのイメージが変わりました。「自然と一緒に」というイメージが強かったのですが、「自然によって生かされている」というイメージに替わりました。また、アイヌの人たちは現代でも生活の中にアイヌ特有の“何か”が入っていると思っていましたが、私たちとはほぼ同じ生活ということにも驚きました。
- ・今日の授業を通して、今まで学習して私が思っていたアイヌの印象がとても変わりました。今日話を聞くまでは、アイヌは日本列島での縄文時代のような文化が栄えている地域の民族だと思っていましたが、昔ながらの伝統を守っていて、アイヌだからこその考え方をしていることを知りました。考え方で1番心に残っているのは“天から役目なしにさずかったものは1つもない”ということを他人事ではなく、自分事として考える、ということです。

社会科の授業に続き、音楽科で取り組んだ授業の内容は前述のとおりである。

関根氏と生徒が直接関わったことで、生徒の振り返りの記述からは、リアルな体験に基づく気付きや発見が見られた。アイヌに関する学習指導は、従来、社会科の歴史分野での蝦夷に関する場面や交易に関わる場面で行われることが多いため、中学生には「歴史上の文化」と捉えている面もある。そのため、関根氏の講話を通して、生徒が既存の知識や考え方との差異を感じ取ったことで、新たな気付きを得ることのできる機会となった様子が見られた。

5. 3 2回の実践を終えて

令和元年度と令和2年度の音楽科の授業は、どちらも「世界の音楽に触れる上で必要な視点とは何だろうか」という学習課題に生徒が向かうものとして実践した。その課題に対して生徒が最終時に記述した内容は、次の5点に要約することができた。

- ①音楽そのものを楽しむこと
- ②自分から興味を持って知ろうとすること
- ③音楽がどのようなことを表そうとしているのかを感じ取ること
- ④その文化が生まれた背景や歴史を知り、またそれらを守る人々の存在を想像すること
- ⑤その文化の良さや魅力を発信すること

上記①から④の内容は、2回（令和元年度、令和2年度）の授業で共通して見られたものであったが、⑤は令和2年度において顕著に見られたものであった。2回の授業の違いは、学習者（それぞれの年度の第2学年の生徒たち）のアイヌに関する直接体験の有無であった。令和2年度は、本プロジェクトの一環として、2月上旬に社会科の授業で関根摩耶氏をゲストスピーカーに迎え、アイヌをルーツに持つ人々の考えを知ったり、アイヌの自然観や価値観に触れたりする機会を得た。上述した音楽科の一連の学習活動は、この社会科の授業に引き続いて行われた。生徒たちにとって、関根氏がアイヌ文化の発信者としての身近なロールモデルとなっていたことが推察される。

22 演奏家・アイヌ音楽研究者。1990年以降北海道各地の伝承者を訪ね、1996年よりアイヌ音楽の論文等を発表。2019年東京芸術大学にて『アイヌの歌の伝承をサポートするメソッドー口頭伝承音楽の現代に適応した学習方法を探るー』で博士号（音楽学）を取得。主な著作に『阿寒のうた（ウポポ）』（2012）、『The Music of The Ainu』（2008）などがある。

関根氏との関わりに加え、社会科及び音楽科の授業実践後に当たる2022年3月4日と3月17日に、本プロジェクトの共同研究者である小塩、山内、板橋の3名は千葉伸彦氏²³を講師に迎え、アイヌの歌の旋律構造などについて学ぶ機会を得た。千葉氏の講話やその後の北海道実地調査（令和4年8月10日～13日）から、筆者（板橋）は本プロジェクトの更なる推進を図る上で、次の3点を今後の課題として捉えている。

1点目は教材曲の選定である。今回教材曲とした「イカムッカサンケー」は生徒にとって覚えやすい旋律だが、輪唱する際、他者と音程を合わせることに生徒の意識が向き、結果的に西洋的な和声の響きを求める様子が見られた。また、「フツアレチュイ」は視覚的な印象が強いことから、音楽そのものよりもパフォーマンスとしての要素に視点が向きやすい。アイヌ文化の導入として生徒の興味・関心を高める点で、これらの曲を用いる有効性は感じたが、アイヌの音楽の特徴を表すより適切な教材曲を探すことが必要であるとも感じた。

2点目は、アイヌの音楽に内在した教材性の認知を広げることである。音楽におけるアイヌ文化は、従来「ムックリ」や「古式舞踊」が象徴的に扱われることが多かった²³。無論それらも大切な文化であるが、本プロジェクトでの実践や学びを通して、筆者（板橋）はアイヌの音楽の特徴を「声」に着目して感じ取ることの興味深さを感じた。アイヌの歌で見られる特徴的な節回しは、地声、裏声の区別だけでなく呼吸から生じる音、声門の動作といった多様な要素によって構成されている（甲地1995他、千葉1996）ことから、これらを聴き取ったり実際に試したりすることは、生徒たちにとって「声」や「響き」の概念や価値観を広げるきっかけになると考える。また、アイヌの様々な歌の旋律の特徴が伝承された地域や世代によって異なる点も、一つの音楽文化の変容を比較的短期間の中で辿ることのできる教材として興味深い。

3点目は北方文化としてのアプローチによる授業づくりである。アイヌ文化を北極圏の文化と捉え、それらの共通性や固有性を生徒に見いださせることで、「音楽」の視点から文化の伝播について考察すること

ができると考えた。これは中学校音楽科の鑑賞領域の「知識」の対象となる「(イ)音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり」や「(ウ)我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性」を理解することに向けた学習活動を行う上で有効な手立てと考える。

令和元年度及び令和2年度に行った授業では、アイヌの音楽が人々の生活のどのような場面で奏でられるのかを想像したり、伝承の過程に視点を向けたりする中で、日本社会の諸問題を含めて考察する生徒たちの様子が見られた。アイヌの音楽を扱う上で、リズムや旋律などの音楽を形づくっている要素に着目し、音楽の授業の範囲だけで学習指導を完結させることもできるが、他教科との関連は、生活や社会における音楽の意味や役割について考えるための根拠となる材料を増やす手立てとなる。教科横断の目的が「教科間での学びの系統性を持たせること」だけではなく、「生徒に何を学ばせ、どのような力を身に付けさせたいかを共有すること」と認識できた点が本実践の成果であった。

本プロジェクトを通して、アイヌの音楽が学習のねらいに応じて多角的に焦点を当てることのできる教材であることが認識できた。引き続き他教科との連携を図り、生徒の変容を検証していきたい。

6. おわりに

中学校での授業実践に立ち会って、教科横断的な授業実践は、生徒にとって同じ題材がさまざまな教科から学びうることを実感できるよい機会であると感じた。大学の場合には、自分の専門科目がはっきりしているために、専門とそれ以外に区分して物事を考えがちである。特に高校までの不得意科目については、自分の専門科目との接点から目を背けたがる傾向にある。一方で、多くの教科を学ぶ中学生にとっては、教科横断的な授業実践は、学びの内容がネットワーク状に広がっていく面白さをリアルタイムで感じる事ができる機会となることがわかった。早い段階からこのような教科横断的な学習の経験があれば、大学生になった時にも自分の専門分野の学習を、高校までに学

23 2021年現在、中学校音楽科の教科書では、『中学生の音楽2・3上』（教育芸術社）の「郷土の祭りや芸能」のページ内でアイヌ古式舞踊が紹介されているのみである。

んだ知識と積極的に結びつけながら学ぶ姿勢が生まれるのではないかと感じた。また大学での授業においても、学生が高校までに学んできたさまざまな教科の学習内容を積極的に関連づけながら教えることで、教科横断的な視点をもつようにしていくことも必要であると感じた。今回の実践は中学校における音楽科の授業であったが、小学校の教員であれば担任として多くの教科を担当するため、教科横断的な視点は設定しやすいであろう。

振り返ると、今回教科横断的な授業を中学校で実践することができたのには、いくつかの前提条件が存在していた。まず、中学校で音楽科を担当する教員が、学校の授業で扱う音楽についての幅広い知識と理解があり、音楽と社会や文化と関係についても関心が深かったことである。加えて、教員自身が広い視野をもって自分の教える教科を見つめ、新しい試みの授業に対しては、必要となる知識をその都度新たに獲得し、時間をかけて授業づくりをしていたことである。教科横断的な授業の場合には、自分一人ではなく、他教科との連携が必要となる。授業研究に必要な時間や経費の確保、校内で教員が相互に円滑な研究交流が行いやすい環境も、教科横断的な授業を進めて行くためには必須であると感じた。

令和2年度の研究終了後も、教科横断的な授業の実践研究は継続中である。音楽科の授業の構成には多くの可能性があり、教科横断的な授業はその可能性を広げる有効な手段であることが本プロジェクトで確認できた。音楽をいかに教えるか、音楽を学ぶとは何を学ぶことなのかについては、今後も授業実践を重ねながら検討をしていきたい。

参考文献

- 小内透（編） 2013「ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状」、『北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 調査と社会理論・研究報告書』29:1-51
- 木村有子 2006「平成18年度音楽科の研究」宮城教育大学附属中学校 『研究紀要』45:51-55
- 甲地利恵 1995「アイヌ古式舞踊伝承団体のレパートリーにおける歌をめぐる～国の重要無形民俗文化財の追加指定を受けた9団体の歌の記録追補～」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1:79-122
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2020『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校音楽』東京：東洋館出版社
- 千葉伸彦 1996「アイヌの歌の旋律構造について」、『東洋音楽研究』61:1-21
- 月溪恒子；山口修（編） 2006『音をかたちへーベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』京都：醍醐書房
- 弟子シギ子 2001『私のコタン』私家版
- 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局；内閣府知的財産戦略推進事務局；文化庁；公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会；京都府 2016「2020年を見据えた文化による国づくりを目指して（京都宣言）」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/2020_bunkaprogram/2020_kunizukuri/pdf/kyoto_sengen.pdf（2022年10月22日最終確認）
- 降矢美彌子 2009『地球音楽の喜びをあなたへ - 未来の地球市民となる子どもたちのための多文化音楽教育 -』東京：現代図書
- 増野亜子；徳丸吉彦（編） 2016『民族音楽学12の視点』、東京：音楽之友社
- 文部科学省（編） 2018『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』東京：教育芸術社
- 文部科学省（編） 2018『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』東京：東山書房
- 文部科学省（編） 2018『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』東京：東洋館出版社

（令和5年1月30日受理）

Teaching music on themes shared with other academic subjects in Junior High School

Report on music classes dealing with Ainu music and culture

OSHIO Satomi and ITABASHI Kaoru

Abstract

This article reports on cross-curricular music classes in Ainu culture at Miyagi University of Education Junior High School in 2019 and 2020 and includes musicological considerations on cross-curricular music teaching. In the first year, music classes dealing with Ainu culture were paired with moral education classes, and, in the second year, with social studies. In their post-class essays, students sought to understand the cultural and social background of the music learned — the most important aspect of learning diverse musics from around the world. Cross-curricular lessons are an effective means for such instruction. However, in order to accomplish this type of teaching, it is necessary that teachers have a broad knowledge of music and a wide-ranging interest. The education of students at teacher training colleges requires classes that also alert students to the relationship between insights they have acquired in various subjects up to high school.

Key words : Junior High School Music Classes, Cross-curricular Lessons, Ainu Culture,
Moral Education Classes, Social Studies Classes